

# 受賞者講演

ゲイリー・スナイダー (Gary Snyder)

訳：西村我尼吾

## 松山への道

2004年11月7日

日本国、松山市において、愛媛県文化振興財団より  
正岡子規国際俳句大賞を受賞するに際し

私は、北米の西海岸の、カリフォルニア州の内部にあるシエラネバダ山脈の人里離れた私の農場から、直行で丁度昨夜到着いたしました。日本の関西に何年も住んでいましたが、四国に渡ったことはありませんでした。そして遂に松山を訪れることができ喜んでいきます。

本日のことは、私にとって本当に感動すべき出来事であります。日本の詩歌文化を讃え、偉大なる俳句の伝統の存在を認め、詩人たちが辿るべき道筋を今日に至るまで照らし出してくれた、驚嘆すべき俳人正岡子規を改めて心に刻みつつ、賛辞を送るため、一言お話をさせていただければと存じます。そして、まさに今ここで、一人の来訪者として、四国の山河に敬意を表したいと思えます。

俳句や日本の詩歌・文化に対しては、私はこれからも専門家とはいえないでありましょうし、初心者であろうと感じておりますが、詩歌に対する愛は今も燃えており、また詩が与えてくれる力は、衰えを知りません。本日はできる限り要点をついたお話を申し上げます。

最初、今回の松山への招待のお話をいただいた時、「私は俳人ではございません。その点をご理解下さっているのでしょうか？」と申し上げました。これに対していただいたお返事は私をほっとさせて下さるもので、私が大賞に選ばれたのは間違いではなかったことが分かりました。皆様のご期待を裏切りませんようにと願っております。これからこの場をお借りして、私が本日こちらへ伺うに至るまでの背景と道程を大まかにご説明した上で、世界における俳句と詩の現状について、いくらか考えてみたいと思います。

## "The path to Matsuyama"

On Receiving the "Masaoka Shiki International Haiku Grand Prize"  
from the Ehime Cultural Foundation, in Matsuyama City, Japan  
November 7, 2004

I arrived just last night direct from the west coast of North America and my remote farmstead in the Sierra Nevada mountains of interior California. Though I did live for many years in Western Japan, I never got across to this island of Shikoku, and I'm glad to finally be visiting Matsuyama City.

This is a truly moving event for me. I hope to be able to say a few words to celebrate the poetic culture of Japan, to acknowledge the great tradition of haiku, and to remember and honor the remarkable haiku poet Masaoka Shiki who set a direction for poets right down to our time. And right here and now I offer my respects, as a visitor, to the mountains and rivers of Shikoku Island

Though I feel forever inexpert and a beginner in these matters, my love for poetry and its power remains ardent and I will try my best to speak to the point. When I was first invited to come to Matsuyama today, I protested "I am not a haiku poet! Please be sure you understand that." But the message I got back was reassuring, my selection was not a mistake. I hope not to disappoint that trust. What I think I will do now is outline the background, the path, by which I got here today and reflect a bit on the situation of haiku and poetry worldwide.

I was born in 1930 and I grew up on a farm in the Maritime Pacific Northwest, the rainy and deeply forested basin of Puget Sound and the lower reaches of the Columbia River. Our place was in the forested countryside north of Seattle. We kept milk cows and a flock of laying chickens, plus some ducks and geese. We had a kitchen garden and an orchard of ten or twelve fruit trees. There were several acres of fenced pasture and beyond that a thriving second-growth forest reaching to a far hill and beyond. As a child I had my share of chores on the farm with cows, chickens, the gardens, and firewood. I also spent a lot of time in the forests outside our fence that were free to my wandering, hunting and plant-gathering.

I mention this because I now realize it was a pre-modern childhood, in which my sister and I were able to see and feel the seasons and their changes, moments of cloud and sky, and the life and death of animals. We had the good luck to work on the land with our hands. My early admiration for Native American knowledges began somewhere in those days.

Although we had Japanese-American neighbors (and playmates) whose parents were local farmers I had little sense of what that meant. I knew we were at the far western edge of the North American continent

私は1930年に生まれ、アメリカ北西部の太平洋岸、コロンビア川下流の、雨がちで深い森に包まれた、ピュージェット・サウンズ盆地の農家で育ちました。シアトルの北に位置する山深い田舎です。我が家では乳牛と卵用鶏を飼っており、鴨やガチョウも何羽かいました。野菜などを育てる庭と、果物の木が10本から12本植わった果樹園がありました。また数エーカーの柵のある牧草地もあり、その向こうには蒼々と茂る二次林が遠くの丘を越えてずっと先まで広がっていました。

私は子どもの頃、牛や鶏の世話、庭の手入れや薪割りなど、農家の仕事の一部を任されていました。また、柵を越えたところにある森の中でも多くの時間を過ごしました。そこではのんびりと散歩したり、狩りをしたり、植物採集をしたりと、自由に遊ぶことができました。

こんなことをお話いたしますのは、自分と妹は、前近代的な子ども時代を過ごしたのだということ、いましみじみと思うからであります。当時、妹と私は、季節とその移り変わり、雲や空が刻々と姿を変える様子、動物たちの生と死を目の当たりにし、それを実感することができました。私たちは大地の上で、この手を直に使って働く幸運を与えられていたのです。私が早くからネイティブ・アメリカンの知恵に対して畏敬の念を抱くようになったのも、この頃のことによって来ています。

日系アメリカ人の隣人（そして遊び友だち）がいて、彼らの両親もやはり地元の農家でしたが、私はそれが意味することをほとんど意識していませんでした。私が知っていたのは、自分たちが北米大陸のはるか西端、そして中国や日本にも海でつながる、太平洋の東端に暮らしている、ということだけでした。みんなアメリカ語、つまり英語を話していましたが、英国やヨーロッパに属しているとい

う思いはありませんでした。森におおわれた西海岸の風景の中に、私の家があったのと同様に、日系アメリカ人の友人たちにとっても、そこに彼らの家があったにすぎません。どちらが後に来たかの、先に着いたのだと思つたことはありませんでした。

私が東アジアについて学ぶようになったのは、自然に対する以上述べてきたような、型にはまらない、若い頃の愛情を持っていたからです。私は小さな少年の時でも、森林破壊や水鳥や鹿のぞんざいな狩猟に、深く心を痛めていました。私の両親は特定の宗教を信仰しておらず、私たちもある一定の教義に従うような教えを受けませんでした。それで私は自分で世界のあらゆる宗教について学んだのです。

仏教の教義のうち、最も重要且つ唯一の倫理の教えは、自然のあらゆるものに対する非暴力、すなわち *ahimsa*（不殺生）であることを学んでから、私は仏教の教えをさらに探求するようになりました。20歳頃からインドや中国の仏教典の翻訳を読み始め、老子の道徳経や荘子は私のものの見方を広げてくれました。

オレゴン州ポートランドにある小さな大学に奨学生として入学した私は、第二次世界大戦前に、丸善から出版された宮森麻太郎の美しい装丁本を手にし、初めて俳句というものに巡り合いました。その本には、小さく繊細な挿絵も描かれていました。翻訳自体は幾分堅く、こなれていないところもあつたようですが、それでもこの短い詩が持つ不思議な力を感じ取ることができました。俳句形式の歴史と俳句の意図するところについての宮森のテキストは、私の心を惹きつけるのに充分なものでした。私は文学における平明さと簡潔さに魅力を感じていました。

私はその頃すでに英語の伝統詩を広く読むようになっており、チョーサーやウィリアム・ブレイクから、20世紀の現代詩人の作品

and at the eastern edge of the great Pacific Ocean that reached the shores of China and Japan. Though we all spoke the American/English language, we had no sense of belonging to Britain or Europe, and my Japanese-American friends were as much at home in that forested west coast landscape as I was, no newer and no older.

It was my unconventional youthful love of nature that led me to learn about East Asia. Even as a boy I was deeply troubled by the destruction of the forests and the careless way that hunting of both water fowl and deer was conducted. My parents were non-religious and did not teach us to follow any particular doctrine, so I studied all the world religions. I learned that the most important single ethical teaching of the Buddhist tradition is non-violence toward all of nature, ahimsa, (J. fusessho). This led me to investigating Buddhist teachings further. At about age twenty I started reading translations of Buddhist texts from India and China. The Dao De Jing (J. *Dotokkyo*) and the Zhuang-zi (J. *Chôshi*) helped broaden my view.

In a small college in Portland, Oregon, where I was admitted as a scholarship student, I first came on haiku in the handsome hard-cover pre-World War II books by Miyamori Asataro, published by Maruzen. They were accompanied by delicate little illustrations. The translations seemed stiff and artificial, but I still got a glimpse of the magic in the little poems. Miyamori's text on the formal history and intention of haiku was enough to get my attention. I had always been drawn toward clarity and concision in literature.

I was already reading widely in the poetry of the English-language tradition, ranging from Chaucer and William Blake to the 20th century moderns. Us young would-be poets had further contact with East Asian verse in avant-garde poetry circles, where Ezra Pound was a strong influence. He was the early and most famous proponent of Imagism, which in turn had been influenced in part by early 20th century discoveries of haiku. Haiku, as we know now, played a strong role in shaping early 20th century modernist poetics. It can be said that the Imagists did not quite grasp it that haiku was more than just one concise image, but their own brief poems are keen and worthy.

Ezra Pound's work reinforced my curiosity about Chinese poetry and soon I was reading Pound's translations from Tang dynasty Chinese collections as well as translations by Witter Bynner, Arthur Waley, and many others. I was writing and publishing occasional poems in skinny little magazines and debating, arguing, and sharing poems with other young people. We all felt especially close to the works of William Carlos Williams, William Butler Yeats, T.S. Eliot and Wallace Stevens, as well as Pound (whose politics we all detested.)

My small but tough college (Reed) was expert at the presentation of the full scope of Occidental thought and history. We got an excellent Humanities education in the Ancient Mediterranean world, the Middle Ages, the Renaissance, the Enlightenment, the rise of Science and Industrialism, then Imperialism, and leading down to our own current violent and confused era. Even back in the fifties they were teaching us something close to what today is known as "critical theory." It is said

に及びました。また当時の若い我々、詩人の卵たちは、エズラ・パウンドの影響を強く受けた前衛的な詩歌の集まりにおいて、東アジアの韻文にも手を伸ばしていました。パウンドはイマジストの先駆けであり、最も著名な提唱者でもありました。

やがてイマジズムは、20世紀初めに見出された俳句からも影響を受けることになりました。俳句はご承知の通り、20世紀初期のモダニスト詩の形成に、非常に強烈な役割を果たしています。イマジストたちは、俳句が一個の簡潔なイメージ以上のものであるというところを、しっかりと認識するまでには至っていませんでしたが、イマジストによる短詩は、鋭敏な感覚に満ち、価値あるものとなっています。

私はエズラ・パウンドの作品を通じて漢詩に深く興味を持つようになり、パウンド訳の唐詩選、その他にも、ウィッター・ビナー、アーサー・ウェイリーなどの多くの翻訳を読むようになりました。小さく薄い雑誌に時折詩を寄稿したり、同世代の若者たちと詩について論争を交わし、議論し、お互いの詩を鑑賞したりしていました。我々はパウンド（その政治性は、我々すべてが嫌でしたが）の他にも、ウィリアム・カローロス・ウィリアムズやウィリアム・バトラー・イエーツ、T・S・エリオット、ウォレス・ステイブンスなどの作品に特に心を寄せていました。

私を通った小さいながら厳しい大学（リード大学）は、西洋の思想及び歴史を幅広く教授することに長じていました。古代の地中海地方、中世、ルネッサンス、啓蒙運動、科学と産業主義の起り、そして帝国主義を経て、今我々自身が暮らしている暴力と混沌に満ちた時代に至るまでを通観する、秀でた人文科学教育を受けることができました。すでに1950年代に、今日で言うところの「批判的理論」に近いものも教えていました。「歴史に学ばざる者は、歴史

を繰り返す定めにある」と言われます。私は今もなお、自然同様、歴史からも物事を学び取るうと努めています。

とはいえ西洋の歴史や文化は、明らかに物事の半面でしかありえないと考える人もいました。私は常に小さな文学仲間のグループと共に、東アジアの芸術と思想に関してさらなる知識を求めています。その仲間の中には、3冊の優れた詩集を上梓した後、70年代初めに自らの命を絶つたルー・ウェルチがおり、また詩人であり小説家の故フィリップ・ウェーレンがいました。ウェーレンは晩年、サンフランシスコの寺院で曹洞宗の禅僧となり、禅心という僧名を授かっていました。

西海岸に在住する私と同世代の作家たちは、北米が精神の真の拠り所であるべきであると感じていました。ネイティブ・アメリカンの文化に対して関心を抱いていたこと、また、西海岸の自然の中で歩き、働いた経験から、そこが自らの家であるという確固たる実感を持っていました。太平洋の向こうに広がる世界と、極東の偉大な文明は、ヨーロッパとのつながりに対する思いと同様、強烈な力を有するものとして映っていました。

しかしながら歴史を今まさにこの時点で考えてみれば、大西洋の東に位置するヨーロッパ大陸の方が大きな影響力をもっています。すなわち、アメリカ合衆国は全体として、今なおローマ帝国、そしてユダヤ・キリスト教的伝統の強い因果に服しているのです。

私は誇り高き、そして幾分かは教育を受けた農業を営む労働者の家庭に生まれました。したがって大学を修了した後、働くことに立ち戻りました。国有林の頂にある、小さな山小屋に暮らす、ひとりっきりの、山火事の見張り人になりました。夏場は消防士や森林警備隊員として勤め、冬になるとサンフランシスコに戻って作家のコミュニティに近い場所で暮らしました。

that "Those who will not learn from history are doomed to repeat it." I am still trying to learn from history (as well as nature).

But for some of us, Occidental history and culture was clearly only half the story. Together with a small group of comrades I was always on the lookout for more information about East Asian art and thought. Members of that circle of friends included Lew Welch, who after three fine books of poems committed suicide in the early Seventies, and the late poet and novelist Philip Whalen. In the last years of his life Whalen was a Soto Zen Priest, known as Zenshin, with a temple in San Francisco.

My generation of west coast writers felt that North America had to be our true spiritual base. Our interest in Native American cultures plus walking and working in our west coast landscapes made us feel thoroughly at home. The Pacific realm and the great civilizations of the Far East, were as vivid as any sense of connection to Europe. Still - as we can see at this very moment in history - that European continent to the east of the Atlantic ocean has a long arm: the United States as a whole is still subject to the powerful karmic effects of the Roman Empire and the Judeo-Christian tradition.

I was from a proud, somewhat educated farming and working family. After finishing college I went back to work. I went into the National Forests to be an isolated fire lookout living in a tiny cabin on the top of a peak. I worked as a summertime firefighter and wilderness ranger, and then spent winters in San Francisco to be closer to a community of writers.

I discovered the four volume set of haiku translations by R.H. Blyth that now we all know so well. Reading the four Blyth volumes gave me my first clear sense of the marvelous power of haiku (The other reading of that era that helped shape my life was books by D.T. Suzuki). I lived with Blyth's translations for a long time, and began to be able to see our North American landscapes in the light of haiku sensibility (which of course includes the human). When I ran across Basho's great instruction "To learn of the pine tree, go to the pine" my path was set.

In the fall of 1953 I moved to Berkeley and entered as a graduate student in East Asian Languages at Berkeley. I read Chinese poetry with Dr. Chen Shih-hsiang and translated poems of the Chinese Zen poet Han-shan / Kanzan. I studied Japanese with Dr. Donald Shively.

This was 1954. Through Dr. Shively I got to know the formidable American Buddhist scholar Ruth F. Sasaki, who had been married to the Japanese Zen Master Sasaki Shigetsu. They had met before World War II when he was teaching Rinzai Zen in a little zendo in New York City. He died during the war. Mrs. Sasaki returned to Kyoto after the war to continue her Zen training with Sasaki Shigetsu's Dharma brother Goto Zuigan Roshi. She was also hard at work translating and publishing Zen texts. She offered to help me get to Kyoto, saying that it would deepen my knowledge of Japanese and Chinese, and give me an opportunity for first-hand Rinzai Zen practice. Just as I was preparing to leave the West Coast I got involved with the literary circles that are now

現在よく知られている、R・H・ブライスによる4巻からなる俳句の翻訳集を見つけました。この4巻を読むことによって、初めてはつきりと、俳句の持つ驚くべき力を感じ取ることができました（同時に私の人生を形作る一助となってくれたその他の読み物は、鈴木大拙氏の書物でした）。ブライスの翻訳は長きにわたって私の座右の書となり、我が北米の自然（ここにはもちろんそこに暮らす人々も含まれます）を、俳句の感性によつて眺めることができるようになりはじめました。芭蕉の「松の事は松に習え」という偉大な教えに出会ったとき、私の進むべき道筋が定まりました。

1953年の秋、私はバークレーに移り住み、カリフォルニア大学バークレー校の大学院生として東アジア言語を専攻しました。私は陳世驥博士と共に漢詩を読み、禪詩人寒山の詩を翻訳しました。またドナルド・シヴェリー博士とはいっしょに日本語を勉強しました。

1954年のことですが、シヴェリー博士を通じてアメリカ人の仏教学の大家であるルース・F・ササキ女史と知り合いました。彼女は日本人の佐々木指月禅師の御夫人でした。二人は第二次世界大戦前、指月氏がニューヨーク市の小さな禅堂で臨済禅を教えておられるときに出会いました。指月老師は戦争中に帰らぬ人となりました。ルース女史は戦後京都に戻り、指月氏といっしょに禅の教えを受けていた、後藤瑞巖老師と共に修業を続けられました。ルース女史もまた、禅の教えを精力的に翻訳し、出版されました。彼女は日本語と中国語の知識が深まるだろうと、私が京都に赴く手助けをして下さり、臨済禅を直接ご教授下さいました。

ちやうど西海岸を離れる準備をしていた際、現在では「ピート・ジェネレーション」として人々の心に残る、サンフランシスコの文学者の集まりに加わりました。私は詩の朗読会に参加し、僅かなが

ら出版もしました。その頃書いた初期の詩にも、長編詩の中に登場する強く短い韻文に、すでに俳句の影響をみることが出来ます。これは私がW・C・ウィリアムズやエズラ・パウンドから学んだ方策でした。

私が日本を最初に訪れたのは1956年5月のことです。仏教学者や翻訳家の方々にお目にかかるようになって間もなく、禅林句集を知りました。

禅林句集とは、漢詩の一部を抜粋したものに加え、古くから伝わる種々のことわざを織り交ぜた、優れたアンソロジーであり、禅の世界では修行問答の中に取り入れられているものです。「短詩」の可能性を探ろうとする者は、漢詩を更に短くした禅林句集のやり方を、必ず参考にしなければなりません。R・H・ブライスが「禅林句集は漢詩を俳句へと変貌させる途上のものである。」と言ったことは周知の通りです。おそらく誰かが（きつと昔の禅僧編者の一人でしょう）、禅の修業に実際使うには、あらゆる詩は長すぎる、もつと短くすれば良くなるに違いない、と実感したのではないのでしょうか。それでその人が何百という漢詩を短くし、新たな短詩を世に出したのです（北米には、一流の禅林句集の学問的翻訳が詳細な解説付きで存在します。編者は、日系カナダ人の学僧であるヴィクター・ソウゲン・ホリ氏です。ホリ氏は京都・大徳寺の僧堂で雲水として何年も修行を積まれました。現在はマックギル大学で教鞭をとっておられます）。

私が京都の優美な「禅文化」のいろいろな面に触れたことは、この上ない幸運だったということは、解っています。しかし日本中を旅するにつれ、大衆文化、一般の人々の暮らし、また戦後勇敢に、なりふりさえ構わずに突き進んでいく日本人の生活ぶりを、非常に素晴らしいものと見るようになりました。私は俳句の精神というも

remembered as the "Beat Generation" in San Francisco. I participated in poetry readings and had some minor publications. Those early poems already show the influence of haiku with strong short verses contained within longer poems. This was a strategy that came to me through W.C. Williams and Ezra Pound.

I first arrived in Japan in May of 1956. Exposure to Buddhist scholars and translators soon brought me to *the Zenrinkushu*, that remarkable anthology of bits and pieces of Chinese poetry plus a number of folk proverbs as they became used within the Zen world as part of the training dialog. If one was looking at the possibilities of "short poems" *the Zenrinkushu* practice of breaking up Chinese poems would certainly have to be included. R.H. Blyth famously said "*The Zenrinkushu* is Chinese poetry on its way to becoming haiku." Maybe it is that somebody - one of the old Zen monk editors - realized that practically all poems are too long and that they'd be better if they were cut up. So he cut up hundreds of Chinese poems and came out with new, shorter poems! (A major scholarly North American translation of *the Zenrinkushu*, with extensive commentary, now exists. It is by a Canadian-Japanese monk-scholar who spent many years as an *unsui* at the Daitoku-ji Sodo in Kyoto, Victor Sôgen Hori. He now teaches at McGill University)

I now know I was extremely fortunate to have been exposed to the elegant "Zen culture" aspects of Kyoto. But as I travelled around Japan I came to thoroughly appreciate popular culture, ordinary peoples lives, and the brave irreverent progressive vitality of postwar Japanese life. I realized that the spirit of haiku comes as much from that daily-life spirit as it does from "high culture" - and still, haiku is totally refined.

One of my friends from early Kyoto days was Dr. Burton Watson. He was on Mrs. Ruth Sasaki's translation team at Daitoku-ji in the late fifties, working on Zen texts, as well as his own projects. I joined that team as an assistant. He has lived in Japan almost continuously since that time, maintaining affiliations with Columbia University. He is without question the world's premier translator from both Chinese and Japanese into English. Only long years of friendship allow me to call him Burt. Though I had read translations of Shiki before, it was Dr. Watson's versions of Shiki published by Columbia University Press in 1997 that enabled me to fully appreciate him. Janine Beichman wrote *Masaoka Shiki*, "His Life and Works" first published in 1982, but I didn't read Beichman's book until after my exciting exposure to Shiki through Dr. Watson. We English/American language speakers are fortunate to have these two excellent books to give us access to a man who was a giant in the world of haiku poetry. (Watson's did a volume of translations of another poet of Matsuyama City, Taneda Santoka, that was also published by Columbia University Press, in 2003. It is titled *For All My Walking*. It is a delightful volume.)

I continued to live and study in Kyoto until 1968. My ability to speak and read Japanese improved a bit, though I am still embarrassed by how clumsy I am with this elegant language. I managed to read haiku in the original just enough to comprehend that the power of haiku poetry is not only from clear images, or vivid presentation of the moment,



のが、「高級な文化」からのみならず、日々の暮らしの思いの中からも生じており、それでなお、詠み出された俳句そのものは全面的に洗練されたものである、ということを確認したのです。

京都で暮らし始めた頃に親しくしていた友人にバートン・ワトソン博士がいました。ワトソン博士は1950年代後半、大徳寺のルース・ササキ女史の翻訳グループに加わって禅文書の翻訳に携わる傍ら、彼独自の研究も進めておられました。私もその翻訳グループに助手として参加させていただきました。ワトソン博士はその頃からずっと日本に住み続け、なおかつコロンビア大学との友好関係を保っておられます。彼は疑いなく、中国語及び日本語から英語への翻訳において世界でもトップクラスの翻訳家です。私が僭越にも彼をバートンと呼べるのは、長く友人付き合いをさせていただいているからに他なりません。

以前にも子規の翻訳は読んでいましたが、コロンビア大学出版から1977年に出版されたワトソン博士の翻訳によって、初めて真に子規を鑑賞しえたと思っております。ジャーニン・バイチマン著「正岡子規『彼の生涯と作品』(Masaoaka Shiki, "His Life and Works")」の初版が出されたのは1982年ですが、私がバイチマンの本を読んだのは、ワトソン博士を通じて子規を読むという興奮を味わった後のことです。

我々英語及びアメリカ語を話す者は、俳句界の巨星の軌跡を紹介してくれる、2つの素晴らしい書物を得られ、たいへん幸運です(ワトソン博士は松山市ゆかりのもう一人の詩人、種田山頭火の翻訳も手がけておられます。同じくコロンビア大学出版より2003年に出版されました。書名は「歩いて歩いても歩いても(For All My Walking)」です。これもやはり珠玉の1冊です)。

私は1968年まで京都に暮らし、勉強を続けました。日本語を

話し、読む力は少し上達しましたが、この優美な言語を前にして、自分は何と不器用なのだろうと、未だに恥ずかしくなりません。

私は原文で俳句を読むものの、俳句の力というものは、明確なイメージ、(俳句的面白さを発見した)瞬間の鮮明な表出、または(人間を超えて存在する)自然や世界に対する超越的な洞察力からのみ生まれるのではなく、目を見張るほど創造的なことばとの戯れにも端を発している、ということを理解するのがやっとというところだと思います。

詩は常にことばに立ちもどります。語彙の選択や、構文の呼吸がびったりと来なかつたりすれば、たとえその他の点でどんな長所を持っていたとしても、それは詩ではありません(こういつた条件はそれぞれ自分の国語で書かれた詩に当てはめられる基準です。当然翻訳詩は同様に判断されるものではありません。しかし、「イメージ」というものは翻訳されうるものです)。

私は1968年に北米(ネイティブ・アメリカンの伝説に倣って、この大陸を「亀の島」と呼ぶことを好む人もいます)へ戻りました。1970年、私は家族と共に海拔1000メートルのシエラネバダにある、人里離れた森の中へ引っ越ししました。松とオークの森です。私たちはそこに家を建て、以来ずっとそこが私たちの帰り着く家となりました。

「帰り着く家」を妻と家族のために持ったことにより、定期的な旅に出掛けやすくなりました。何年にもわたって、講義をしたり、朗読会を開いたり、ワークショップを行ったりしています。

私は俳句の感性を大事にし、陸地に囲まれ、中度の標高を持つシエラネバダ山脈の山河の中で、季節の合図となるであろうもの、「季節」を探しています。どのような乾性の香草や花を、どのような鳥を、どのような天気の兆候を見出すでしょうか。日本とは異なってい

or transcendent insight into nature and the world, but in a marvelous creative play with the language. Poetry always comes down to language - if the choice of words, the tricks of the syntax, are not exactly right, whatever other virtues a piece of writing might have, it is not a poem.. (These are the standards we apply to poetry in each our own language. Poems in translation of course can not be judged this way. "Images" however are translatable.)

I returned to North America in 1968 (Some of us prefer to call it "Turtle Island" after Native American creation stories). In 1970 I moved with my family to a remote plot of forest land in the Sierra Nevada at the 1000 meter elevation - pine and oak woods. We built a house and have made that our home base ever since.

Having a "home base" for my wife and family made it possible to go on periodic trips over the years doing lectures, readings, and workshops. Honoring the haiku sensibility, I look for what would be the seasonal signals, kigo, in our Mediterranean middle-elevation Sierra mountain landscape. What xeric aromatic herbs and flowers, what birds, what weather signals, will we find? They are different from Japan. I read translations of the myths and tales of the Native people who once lived where I live now, from the Nisenan language (which is no longer spoken) and I can see how much they valued the magic of the woodpecker, the sly character of fox and the trickster coyote. High-flying migratory sandhill cranes pass north and south in the spring and in the fall directly over my house. They have been doing this for at least a million years.

The Euro-, African-. and Asian-Americans are just a little more than 200 years on the west coast of North America, and it will be several centuries yet before our poetic vocabulary matches the land. The haiku tradition gives us the pointers that we need to begin this process, which will be part of making a culture and a home in North America (and I hope eventually, for all people, a home on planet earth) for the long future ahead

The ancient Buddhist teaching of non-harming and respect for all of nature, (which is quietly present within the haiku tradition) is an ethical precept we are in greater need of now than ever, as the explosive energy of the modern industrial world pushes relentlessly toward an endless exploitation of all the resources of the planet.

Now I want to go back to talking about how Japanese haiku poetry has been discovered world-wide. Up til now I have been speaking of haiku as it exists in Japan from early times up to the present. Though haiku may be considered old fashioned and conservative by some people in Japan, in the rest of the world it is received as fresh, new, experimental, youthful and playful, unpretentious, and available to students and beginners who want to try out a poetic way of speaking.

As we all know there's scarcely a literate culture on earth that doesn't have some translations of Japanese haiku in its poetry anthologies. From this, an international non-Japanese haiku movement has begun, which takes the idea of haiku hundreds of new directions. School teachers in Denmark, Italy, or California have no hesitation giving translations of Japanese haiku to their students, and then also reading

ます。自分たちが現在住んでいる土地にかつて暮らしていた先住民の神話や伝説のニセナン語（現在は使われていない言語）からの翻訳を読んでみると、キツツキが見せる奇術、キツネやトリックスターのコヨーテのずるがしこい性格にネイティブ・アメリカンたちがどれほど感心していたかを読み取ることができます。移動性のカナダヅルが、春には北へ、秋には南へと高い空を飛来していくのが私たちの家の真上に見えます。カナダヅルたちは、このような渡りを少なくとも100万年は続けてきたのです。

ヨーロッパやアフリカ、アジアから来たアメリカ人たちは、北米の西海岸に200年と少し暮らしていますが、我々がその大地に響きあう詩的なことばを編み出すには、まだ数世紀はかかるでしょう。俳句の伝統は、我々がこの過程に取り掛かるのに必要な指針を示してくれます。そしてこれは今後長きにわたって北米に、ひとつの文化を、ひとつの家庭（ホーム）を（そして願わくは、やがて全ての人々にとつて、地球という惑星の上にひとつの家庭を）作り出すための一助となつてくれるはずです。

古くから伝わる仏教の不殺生の教えと自然のあらゆるものに対する畏敬の念（これは俳句の伝統の中に密やかに存在するものでもあります）は、現代の産業界の爆発的ともいえる力が、情け容赦なくこの星のあらゆる資源を、終わりになく開発しようとしている今、我々がこれまでのどの時代にもまして必要としている倫理観です。

ここで、日本の俳句がどのようにして世界中で知られるようになったか、という話に戻りましょう。私は、俳句が古くから現在まで、日本にずっと存在しているという話をしてきました。日本人の中には、俳句を時代遅れで保守的だと見る方もおられるでしょうが、一歩日本を踏み出せば、世界のどこにおいても、俳句は、瑞々しくて斬新、実験的で、若さと遊び心にあふれ、且つ慎み深く、詩的な語

りをやってみたい学生や初心者にも、親しみやすいものと受け止められているのです。

周知の通り（そして私が今ここに理由の一つでもあるのですが）、地上のあらゆる文学の詩歌選集において、日本の俳句の翻訳を含んでいないものは、稀有と言つてよいでしょう。ここから国際非日本語俳句運動というものが端を発し、俳句の思想の何百という新たな方向性が見出されています。デンマークやイタリア、またカリフォルニアの教師たちは、何の躊躇もなく、日本の俳句の翻訳を生徒たちに読ませます。これに合わせて自国で書かれた短詩を読み聞かせてやり、子どもたちに周りをながめるように、目に留まるものについてよく見て考えを巡らせるように、またイメージを想起するように働きかけ、子供達自身に短い詩を作らせるのです。

世界中の子どもがこんなふうにして、詩について、そして自分自身について、学んでいるのです。俳句の伝統そのものに必ずしもあてはまることではないかもしれませんが、若い人々にとつて、自分たちの言語と想像力を解放するということは、極めて価値あることです。短詩や俳句は、英語あるいはヨーロッパ言語で書かれた通常の詩よりも、子どもたちにやる気をおこさせます。

英語やヨーロッパ言語の詩というのは、韻律が厳密に守られて、形式ばっているか、あるいはモダンで実験的過ぎるか、いつもどちらかに偏っているように子供達には思われます。俳句の伝統は今や、新しく詩というものを学校で教える際に、世界中で実験的に試みられている運動の一部となっています。俳句が讃えられるもう一つの理由はここにあります。

カリフォルニア大学のデービス校の大学院の創作文プログラムの教師として、私は、ロバート・ハスの素晴らしい本である「エッセンシャル・ハイク」を使って、真剣に詩作を学んでいる上級年次の

locally-written brief poems to them, telling the children to look around, see what they see, have a thought, make an image, and write their own brief poem. Children everywhere are learning about poetry and themselves just this way. Though this may not be entirely true to the haiku tradition itself, it is of immense value to young people to have their language and imagination liberated. Short poems and haiku inspire them more than the usual English or European -language poetry which always seems (to children) either too metrical and formal or too modern and experimental. The haiku tradition is now part of a world-wide experimental movement in freshly teaching poetry in the schools. This is another reason to celebrate haiku. As a teacher in the graduate creative writing program at the University of California at Davis, I taught the haiku tradition to older students on a serious poetry-writing track, using Robert Hass' superb book *The Essential Haiku* and it was as surprising and useful to these sophisticated young adults as to any schoolchild. Haiku amazingly reaches every class, every age.

I introduced my stepdaughter to poetry at age eight with the idea of haiku! I read and recited haiku and other short poems to her, and then said, "You do it yourself! Look at something and say it - look at something else and say it and then tell me what your mind says" She got the hang of it and soon was delightedly producing these personal mini-poem-utterances. We don't call them haiku.

37 Eventually somehow I became known as a poet. My poetic work has had many influences: Scotch-English traditional ballads and folksongs, William Blake, Classical Chinese poetry, Walt Whitman, Robinson Jeffers, Ezra Pound, Native American songs and poems, haiku, Noh drama, Zen sayings, Federico Garcia Lorca, and much more. The influence from haiku and from the Chinese is, I think, the deepest, but I rarely talk about it. Though not a "haiku poet" I have written a number of brief poems, some of which may approach the haiku aesthetic. They also fit into a larger project which I call "Mountains and Rivers Without End" in which I am searching for ways to talk about the natural landscapes and old myths and stories of the whole planet. I am sure I have bitten off far too much, and my poetry might be better if someone just cut it up into little pieces.

Over the years I have made many trips to Japan, and continued to learn from contemporary Japanese poets, especially Tanikawa Shuntaro, Ooka Makoto, and Sakaki Nanao - Nanao is a truly unique figure. The contemporary Korean poet Ko Un's very short Zen (Korean *Son*) -inspired poems are hugely pleasurable and very subtle. I enjoyed getting to know the haiku of Dr. Arima Akito through the translations of Miyashita Emiko and Lee Gurga. Getting to know Lee has been an education and a pleasure of its own and I am grateful for his help.

Before I wind this up, I want to share with you the pleasure I take in a just a few of Masaoka Shiki's haiku (I could cite many more.) For example,

学生に俳句の伝統を教えました。その本は、小学生に対しても、又洗練された若者に対しても同様に、驚きでありかつ有益でありました。驚嘆すべきことに、俳句はあらゆる階層、あらゆる年齢に届くのです。

私は自分の養女に、8歳の時に俳句の着想を以って詩を紹介しました。私は俳句やその他の短詩を彼女に読み聞かせ、そしてそれから、「今度は自分でやってごらん。何かを見て、それについて何か言ってみるんだ。今度は別のものを見て何か言ってみてごらん。私におまえの心が語るところを聞かせておくれ」と言いました。娘はこつを掴んで、やがて、個人的な短い詩のような言葉を発するようになりました。私はそれが俳句だとは言いませんでした。

やがてどういうわけか、私は詩人として名前が知られるようになってきました。私の詩作は、多くのものから影響を受けて生まれていきます。スコットランドやイングランドのバラッドや民謡、ウィリアム・ブレイク、漢詩の古典、ウォルト・ホイットマン、ロビンソン・ジェファーズ、エズラ・パウンド、ネイティブ・アメリカンの歌や詩、俳句、能、禅の教え、フェデリコ・ガルシア・ロルカ、その他枚挙に暇がありません。

私が思うに俳句や漢詩からの影響が最も深いようですが、それについて語ることはほとんどありませんでした。私は「俳人」ではありませんが、多数の短詩を書いてきたことは事実です。その中に俳句の美学に近付いたものがあつたかもしれません。これらの短詩は、私が、この惑星全体の自然の風景や古い物語について語る術を探している、「絶ゆることなき山河」と呼ぶ、より大きな取り組みにぴつたりくるものでもあります。私が、はるかに自らの手に余ることを試みてきた、ということは自覚しております。そして私の詩も、どなたかがもつと短いものに分解して下されば、より良い作品になる

かもしれないと思っております。

私は長きにわたって、繰り返し日本を訪れてきました。そして日本の現代の詩人たち、特に谷川俊太郎、大岡信、ナナオサカキから学び続けています。ナナオは実に個性的な人物です。現代の韓国の詩人高銀の禪（韓国語ではソン）に触発されたとても短い詩も、極めて面白く、いわく言い難いものです。私は宮下恵美子とリー・ガーガの翻訳を通じて、有馬朗人博士の俳句を知るようになってうれしく思いました。リーに出会って学び、また出会えたこと自体をうれしく思っています。彼の力添えにも感謝しています。

私の話もそろそろ終わりにしなければなりません、その前に正岡子規の俳句をいくつか紹介し、皆さんといっしょにその魅力を分かち合いたいと思います。たとえば

稲妻や盥の底の忘れ水

稲妻盥の底に誰かが捨てた水

顔を洗おうと身をかがめるたびに、ここで稲妻が光ってくれたら、と必ずや思い出す一句です。

雪残る頂一つ国境

一つの頂その上にまだ雪そこがその地方の終わるところ

なぜなら、私が暮らしている場所（カリフォルニア州の山間）から東の方角、さほど遠くないところに、春の万年雪をたたえた山があるからです。私はいつも「あの向こうには砂漠のネバ

ダ州が広がっているんだな」と思いを馳せた後、子規のことを考えます。

*inazuma ya / tarai no soko no / wasure-mizu*

Lightning flash -  
in the bottom of the basin,  
water someone forgot to throw out

- Which I remember almost everytime I bend over and wash my face,  
hoping for a flash of light!

and,  
*yuki nokoru / itadaki hitotsu / kuni-zakai*

A single peak,  
snow still on it -  
that's where the province ends

- Because from where I live (which is in the mountains of California)  
there is a mountain not too far to the east forever with springtime  
snow. I always think "beyond that is the desert State of Nevada" - and  
remember Shiki -

But perhaps most interesting for me is this:  
*nehanz / hotoke hitori / waraikeri*

Picture of the Buddha  
Entering Nirvana  
One person is laughing!

When I was a Zen student in Kyoto my teacher once gave me a little  
testing-koan which was "In the Buddha's Nirvana-picture, everyone is  
crying. Why are they crying?" Some years later I find Shiki's *nehanz*  
haiku and I can never stop laughing. What a fresh mind he had!

(All the above translations are by Burton Watson)

To finish up. Yves Bonnefoy in his excellent presentation here in  
2000, said that we in the Occident are not experiencing "a kind of haiku  
fashion" but an awakening to a necessary and fundamental reference,  
which can only remain at the center of Western poetic thought." And  
he goes on to say, that all these exchanges are for the "greater good of  
poetry, which is our common good and one of the few means that remain  
for preserving society from the dangers that beset it".

It is quite to be expected that Mr. Bonnefoy and myself, French  
and American, each in our own way, invoke haiku as a benefit and  
a value in matters of the troubled world today. People are always  
asking "what's the use of poetry?" The mystery of language, the poetic  
imagination, and the mind of compassion, are roughly one and the same,  
and through poetry perhaps they can keep guiding the world toward  
occasional moments of peace, gratitude, and delight. One hesitates to  
ask for more.

しかし、たぶん私にとって最も興味深いのは、次の一句かもしれない。ません。

涅槃像佛ひとりは笑ひけり

仏陀の絵涅槃に入っているその人が笑っている

私が京都で禅を学んでいた頃、先生がちよとした公案を私に問いかけてました。「仏陀の涅槃図の中では誰もが泣いています。なぜ皆泣いているのでしょうか？」というものでした。何年か後にこの涅槃像の句に出会い、私は笑いを抑えることができませんでした。子規は何と新鮮な心を持ち主だったのでしよう！

(注：英語翻訳は全てバートン・ワトソン博士による)

さて、私の話も本当におしまいにいたします。同じ壇上で2000年に、イブ・ボヌフォア氏がすばらしいお話をされました。我々西洋に暮らす者が今経験しているのは、「一種の俳句ブーム」ではなく、不可欠で根本的な典拠への目覚めであり、それはきつと今後西洋詩の詩的思想の中心に座を占めつづけることだろう、ということをおっしゃいました。さらにボヌフォア氏は、こういった東西交流のすべてが詩のもたらす、より大きな至福に資するものであり、詩は我々の共有の財産であり、且つ世にのしかかる危険から社会を守る手段として、わずかに我々に残された手段の一つである、とも述べられました。

フランス人のボヌフォア氏とアメリカ人の私がそれぞれ独自の視点から、俳句を、今日の苦悩に満ちた世界において、ためになるもの、そして価値あるものとして引き合いに出すことは十分考えられることとあります。人々はよく「詩が何の役に立つのか？」と問

い掛けます。ことばの神秘、詩のもつ想像力、憐れみの心、これらは全て概ね同一のものであり、おそらくこういったものが詩を媒介として、世界を時折、平和、感謝、そして喜びの瞬間へと導いてくれているのです。これ以上のことを求める人はまずいでしょう。私をこの場へお招き下さったことに改めて感謝申し上げます。この地の偉大な詩人たち、特に正岡子規に私の合掌を捧げます。四国の山河には、あつかましくも挨拶をしたい、などという私のおこがましさを大目に見てくれるよう頼んでみようと思います。

サンスクリット語で *Satyamangalam* と言うように、「あらゆる鋭敏な心の持ち主に幸あれ」。

ゲイリー・スナイダー

(訳：西村我尼吾)

Thank you again for inviting me here. A *gassho* to the great poets of the land, especially Masaoka Shiki. I would ask the mountains and rivers to overlook my brashness for having the nerve to say hello;

And as it goes in Sanskrit, *Sarvamangalam*, "May good fortune come to all Sentient Beings."

Gary Snyder